
心の扉

紫苑 鎌鼬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の扉

【Nコード】

N3288BA

【作者名】

紫苑 鎌鼬

【あらすじ】

黒い毛並みを持つ狐が、矢にやられ怪我をおい、まよいこんだのは人間貴族の中であだなされる“凍結の姫君”の屋敷の庭であった。そこで狐は彼女と出会う。しかし、凍結の姫君とよばれているような人柄ではなく、誰もを魅了する天使の笑みを浮かべる喜怒哀楽あふれる貴族の姫だった。が

狐に対して天使であつても人間に対しては凍結の姫だった・・・。

そんな姫の名を狐はふと、呟く。「アクアリア・・・か。」と。

狐だけど狐じゃない彼と二つの性格？を持つ彼女のダブル主人公の

お話を
です。

第一章 狐編 出会い

グサッ

「クウヴウー」

一匹の黒い狐の前足（右側の足）に一条の矢が射抜いた。

「よし、しとめたぞ！！」

遠くでおぞましい人間の歓喜する声が響いた。

黒狐は痛みにくらえながら矢をくわえて引き抜く。
そして逃げた。

森の中を全力で駆けていく。
走るたびに、痛みが全身を駆け巡った。
だが、とまるわけにはいかない。

「っ！？こら、まちやがれ！！」

「・・・おい、にげられるぞ！」

「はやくおいかけるぞ、折角の狩った獲物が・・・」

人間の声が遠くなるのが分かる。
それが完全に聞こえなくなったとき、

狐は、隠れやすい茂みの中に体をつずめた。
前脚の右足に激痛が走る。

「クウウウンッ」

傷口を何度もなめてはそれを耐えた。

そんなときだ。

「まあ、声が聞こえたと思ったら・・
こんなところに隠れてたのね。」

一人の人間の女が、茂みを分け、狐を見つけた。
水色の髪をした、翡翠の瞳を持つ人間の女だ。

「グヴウウ・・・!!」

来るな!! 近寄るな!! おぞましい人間め。

狐は恨みと怒りを込めたまなざしで
女を見つめる。

そして、後ろに退こうと立ち上がったとき、
痛みが走った。

「クヴウウ”————!!」

がくつと崩れ落ち、たまらず体を地べたにつずめた。

「・・・っ!

け、怪我してるじゃない!!

そんな体で無理しないで。私が治してあげるから。

私はこわくないわ、ね?」

彼女は狐の負った怪我を見て青ざめた。

そして、狐をいたわるような心配そうな表情をし、
優しそうな声色で近づいてくる。

最後は本当に何の裏のない純粹に救いたいという気持ちの現れである・・・

天使のような笑顔で微笑みかけた。

百面相をする忙しい女だなと思う反面

狐はその人間の女の微笑に衝撃を受けた。

「・・・!？」

狐が衝撃を受けている間に女は、狐を腕に抱いた。
びくつと反射的に狐は体をこわばらせる。

「・・・大丈夫、私はあなたに危害を加えたりしないから」

女は優しく狐の体をなでながら、怪我をしている脚に手をかざした。

スシャアアア

女の手から光があふれ出した。

「・・・!」

狐は目を見開かせた。

体からというより、前脚から痛みが徐々に遠のいた。

「・・・ふう。」

女が一息ついて、かざしていた手を下ろした。

「・・・完全に、完治させることは、できないけれど、もう激しい痛みは襲ってこないはずだから、ね？」

女は疲れをこらえたような天使の笑みを浮かべた。

狐を・・・思いやる、救いたいという気持ち が ひしひしと伝わってくる。

「・・・」

狐は、この変わった女をじっと見つめた。

自分を救ってくれた人間、

邪な考えを持たない純粋な人間――。

何故、この忌々しい黒に染まった狐を助けたのだろうか。

「・・・アクアリア嬢、どこですか」。

茶の時間くらい一緒にいてくれたっていいじゃないか

アクアリア嬢――」

誰かを呼ぶ声と、同時に少し遠くから近づいてくる足音。

「・・・はい、今きます」

その声の方角に振り向いて、先ほどまで天使の笑みを浮かべた女が冷やかな何の感情もこもっていない声で応えた。

そのときの、表情は凍てついたように冷たく冷静すぎるものだった。

「・・・！」

しかし、それは一瞬だった。

「ごめんね？もつと一緒にいたかったんだけど、邪魔が入ってしまったわ。ここはね、私の屋敷の庭なの。」

ずっとここにいていいから。ほかの動物たちも住み着いているし。じゃあ、またね」

すぐにまた天使の笑みを浮かべて彼女は狐の頭をなで、小声でなぜか謝罪してくる。

あの感情のない表情など嘘のようだ。

そうして彼女は急いでその場を去っていった。

「アクアリア嬢！探しましたよ！なんで庭に勝手に行くかなー、僕を誘ってくれれば喜んでいくのに」

その場からでも、女を捜しに着たらしい若い男がそうあきれた風な物言いで彼女を責めた。

「何故、庭に出ようなどと、あなたを誘わなければならないのですか。」

そもそもお茶の時間など、誘われてもいませんが？？」

さっきの感情のこもっていない声。

あるとしたら、男に対する拒絶と苛立ち。

彼女はとても冷静にそう彼に言葉を返していた。――別人のようだ。

「冷たいなあー。」

そこは、・・・客人として来てる僕への気遣いとかでお茶の時間くらいもてなすのが思いやりってやつだろう？。」

若い男はその冷たい言葉に慣れてるのか

彼女にそう、問いかける。だが、少し言いくそな声色だった。

「それは私の役目ではありません。
私の妹では不満がありますか？」

今日のお茶の時間は妹のフレアリンがもてなすよう計らっていたのですが

何か粗相でも??」

彼女のほうはというと、これまた冷静に応えている。

なにも動じていないような響きを持っていた。

本当に、さっき怪我を治してくれた天使のような女だったのだろうか？

と疑問に思うくらいだ。

「いや、フレアリン嬢は立派だし完璧だったよ。
でも、今日は君がいいんだけどなあー。」

「私にしてほしいならそうと、そのときにおっしゃってください。
フレアリンがかわいそうではありませんか。

エメルルド様の気まぐれのせいでは、

今頃フレアリンは粗相をしたかもしれないと青ざめていたらどうするのです？

私には、あなたのいう、

思いやりも気遣いも心得ていないのに

そんなことになってたら・・・」

言葉からしたら、彼女は不安を抱えてるように聞こえはいいが
声色はいたって冷静だ、少し皮肉も入ってるように聞こえる。

「じゃあ、今から一緒にフレアリン嬢のところに行こう。」

そうすれば、いらぬ杞憂だったと思ってくれるよ?」

「・・・そうですね。そうしましょう。
じゃあ、さっさとすませましょうか」

彼の意味ありげな声色に心底嫌そうな声で彼女は応えた。

そうして、二人は去っていった。

狐は、しばらくして、

「アクアリア・・・か。」

と、ぼつりと意味ありげに呟いたのだった。

――こうして、二人?の運命の歯車が動き出した。

第一章 狐編 出会い（後書き）

狐視点のような傍観者視点のような表現の仕方ではないです。
狐視点です。

次回は・・・アクアリア嬢視点で話を進めます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3288ba/>

心の扉

2012年1月8日16時52分発行